

変態が変態(変身)能力を得て異世界転生するお話

茶狂い眼鏡

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界、トリニティーはアースガルズの戦神の暴走によって未曾有の危機に晒されていた。

このままでは生けとし生ける者は全て彼の神の軍勢に殺され尽くし、死後の魂すら永遠に神々の奴隷に洗脳されて冥府すら危うくなる——しかし、曲がりなりにも戦神であるその神を打ち倒すには最低でも同格の力を持つ存在が必要で、そんな者達が争えば世界がヒギイ!? してしまう。

そこで悩みに悩んだ冥府の女神は賭けに出た。

女神様「チートがダメならギャグで殴れば良いじゃない」

オリ主くん「おK」

現地人「やめろ（ガチトーン）」

これはそんな頭の悪い物語。

息抜きにやった、反省も後悔もしていない。

目次

【一発目】	これはチートですか？いいえ、ナマモノです	1
【二発目】	このナマモノ…変態するよ!! (マジキチスマイル)	6
【三発目】	R-15 「微グロと微エロならセーフじゃろ?♂?」だけど なあ!!」	12

【一発目】これはチートですか？いいえ、ナマモノです

その世界の名は“トリニティー”、神の住まう世界“アースガルズ”、人や動植物、亜人が暮らす“ミドガルズ”、そして前述した二つの世界の生物が死んだ際に流れ着く死者の国、“ニヴルヘイム”の三つが織り重なって出来た世界である。

特に寿命がある者達が住むミドガルズは永き時をかけて様々な生物が繁殖し、多様化してゆき、数々の国が生まれて時に衝突しながらも文明を築き上げていく中で次第に寛容を知り、バランスを保つようになり、繁栄していた。

だが、それを快く思わないのが神の世界——アースガルズの王、ヴオーダンであった。

ヴオーダンは戦神であり、戦争を司る神であるが故に平和という状態は自身の権能を弱体化させかねないと危惧して自らの眷属をミドガルズに遣って人や亜人等の知的生命体を狩り、死した魂をヴァルハラという館に幽閉して洗脳し、自分達に忠実な崇拜者であり、ミドガルズの戦火を拡大する尖兵として利用し出したのだ。

我執に囚われた戦神は最高位の神でありながらその本分と世界の生い立ちを忘却してしまったのだろう、それは直接被害を受けているミドガルズのみならず、死者の魂を慰撫して浄化し、再び輪廻転生させてミドガルズに新たな生命を送り出す役割を担うニヴルヘイムにも甚大な被害を与えたのだ。

このままでは遠からず新たな命は産まれなくなり、世界の住人はアースガルズの神々とその神々に囚われ、隷属させられた死者しかいなくなってしまう。

「——そんな訳でニヴルヘイムの管理者である妾、ヘルはこの世界の冥府の管理者である閻魔に掛け合って彼の暴君と化した神王を打倒し得る者をスカウトしに来たのじゃ」

「北欧神話をバグらせたような惨状だな、うん」

拝啓、お父様、お母様——インフ○エンザで先に死んだ親不孝者をお許し下さい。

と、まあ……普通？に病死した俺を待っていたのは北欧神話のあの世の神様だった。

いや、俺普通に日本生まれの日本人だし、仏教徒じゃなくて自他共に認める変態だけでも、それにしたってなんで北欧神話？そこはせめて黄泉比良坂じゃない？（世界観が）壊れるなあ……？。

「せんせー、意見良いですか？」

「……申してみよ」

「ぶっちゃけたただの変態に力を与えるより、歴史やファンタジーで名を馳せた英雄を召喚した方が手っ取り早くない？閻魔様に頼んで死人からスカウトするんなら尚更」

怒るかな？と思ったが、彼女は「うむ……」と、遠い目をして答える。

「妾も最初はそう思い、閻魔めに訊ねたのだがな……人の英雄は皆、既に浄化されてまっさらな生命として生まれ変わっており、ならばと半神半人や神の化身を紹介してもらったのじゃが……」

インドのやベー連中や中国のやベー連中しか物の見事におらんな、アレをけしかけたら最期、戦いの余波で世界が消し飛びかねんで泣く泣く断念した」

ああ、うん……中国も中々だけどインドはヤバイね、神関連だと特に。家族を殺された復讐に世界が終わるまで士族を皆殺しにしてきた聖仙とか、末法の世界に墮落した悪人ごとトドメ刺して、残った善人達を新たな世界に導く未来王とか……あつ、でも覚者とか比較的（インド基準で）穏便な方ならワンチャン無いかな、訊いてみよう。

「お釈迦様はダメ？」

「ダメだな、説法が通じるような気質ではない——対話、説得が通じず互角以上の力を持つ者を派遣して戦わせれば世界が滅びる——ジレンマに悩まされていたある時、お主という死にたての珍妙な魂を見つけて閃いた」

女神はそこで言葉を一旦切り、答えを口にする。

「チートで物理的に殴り合うのがダメなら、カオスというギャグ概念で殴れば良いではないか」

「イカれているな……だが、そういう発想嫌いじゃないぜ!!」

かくして早死にした変態と血迷った冥府の女神の契約は成立したとき。

一方その頃、ミドガルズは神々の軍勢による蹂躪劇が進み、人や亜人達の国々はもはや殆んどが屍と瓦礫が散らばった廃墟と化していた。

そんな中、人々の多くはニヴルヘイムの神、ヘルを祀っている大聖堂に避難し、そんな彼等を護る騎士達も負傷者や戦死者を出しながらも誘導して籠城していた。

「詰んでいるー」

なんとか一個中隊規模の騎士達を確保しつつ自国の民衆をここまです保護して来れたのは奇跡に近い——国王の庶子として生まれ、騎士としてこれまで心身を鍛えてきた金色の長い髪を黒のリボンで後ろに束ねた少女、ソフィアは治癒魔法で同胞の手当てをしながら現状の打開策を思いつけずにいた。

将軍や騎士団長はこの撤退戦の発端となった神々の超常的な力に

よる転移による首都への奇襲を受けて戦死、国王もまた、このままでは自国に住む者達を皆殺しにされてはならぬと自ら囚われの身となり、時間を稼いでいる。

その結果が王の庶子であり、騎士として育てられてきた彼女に繰り上げで暫定的な指導者の役割が回ってきたのだ。

庶子とはいえ騎士団の者達を始めとする周囲の人々はソフィアを対等に扱い、優しく接してきてくれた上に人並み以上の善性を持つ彼女は責任を捨てて逃げるといふ選択肢は無い。

だが、いずれにせよ血に餓えた敵の軍勢がここを包囲し、攻め落としにくるのはすぐである。

神々の国にいる異形の馬の足はミドガルズの馬とは比べ物にならぬ程疾く、屈強であるしそもそももの話、首都を陥落された時のように転移で次の瞬間、あの軍勢が眼前に現れたりしたらひとたまりもない。

「つくづく戦の定石を無視してくれるものだなー」

ソフィアは治療を終えたとなくなしに大聖堂の奥にある、祈りの間へ足を運びながら思考を巡らせる。

「となると、民衆を逃がすためにやはり自分を含む騎士達には負け戦に挑んで死んで貰うしかないかー」

と、彼女が悲壮な決意をしている時であった。

祭壇に閃光が迸る——それを目の当たりにしたソフィアはすわ、敵襲かと身構えるが、その閃光が収まった所に鎮座する物体を観て、思わず絶句した。

そんな彼女を見た楕円形(?)に黒線の手足を生やし、禍々しい顔を付けた物体は「フム…と、少し思案してから口を開いた。

「たまごです、よろしくおねがいます(CV. 中○讓治)」

無駄に渋いイケボで発せられた挨拶らしき第一声に、彼女の頭は混乱を窮めながらも必死にどう切り返すか、目まぐるしく回転する。

だが、現実は無情だ——どうしようもないくらいに目の前のナマモノに対する情報が無い。

唯一わかった事はこのナマモノは先程の言葉からして卵を自称しているという事ぐらいである、だからなんだと言う他にない。

「お前のような卵があつてたまるか」

姫騎士ソフィア、物語によつては悲劇から立ち上がる英雄として名を馳せそうな彼女は目からハイライトが消えそうな虚しい感覚に陥りそうなのを懸命に耐えてどうにかツツコミを入れた。

これが冥府の女神から贈られた特典によつてナマモノと化した元地球人とファンタジー世界の人間のファーストコンタクトである、奇跡と魔法を謳い文句にしている正統派ファンタジーノベルに土下座をせねばなるまい。

【二発目】このナマモノ…変態するよ!! (マジキチスマイル)

「——という訳で私はこの世界のあの世の神様に協力するため、ここに来たんだ。たまごになつてな!!」

「自分の事を元人間だと思ひ込んでいる異常な卵じゃないんですか……」

大聖堂、祭壇にて騎士ソフィアは絶望的な状況に現れた自分達が信仰している神の使者、或いは救世主的な役割を持つらしい存在に対してかなり塩対応であった。

これが歴戦の英雄だったのなら彼女も歓迎しただろう。

或いは彼の世界にあったなろう系と呼ばれるネット小説の一部界限で一時流行っていたタイプの主人公ならば、めんどくさく思いながらも利用するだけ利用して、用済みになった所でどう始末をつけるか画策しながらも、いよいよの時までは笑顔を貼り付けて適度にヨイショしてやっていたのかもしれない。

だが、たまごだ——しかもガワは卵っぽいクセに煮ても焼いても食えなさそうな意味不明のナマモノである、どう扱えというのだ。

これならば適度に美女を与えて性欲と承認欲求を擽って満たしたりしてやり、下手に出てお願いすればホイホイ言う事を聞いてくれる俺TUEEE!!主人公の方が扱いが楽だ——どうしようもないくらいに性根が腐っていたら、言葉巧みに弱点を聞き出すなり油断させた所で首を斬り落とせば済みそうだし。

なお、読者諸君に分かりやすく説明出来るようにネット造語的な言葉を用いたが、これが今のソフィアが考えている概ねの内容である、実に強かな人間だ——流石ヒロイン汚いな、実に汚い…そこに痺れるウ! 憧れるウ!!

だが、さしもの彼女も相手がUMAとなつては分が悪すぎた。

「おお、神よ！なんでこんな訳の分からないナマモノを送りつけて来たのですか!!」

返事はない、ソフィアは神に人の心は分からないのだと理解した。頭を抱えている彼女の姿を流石に見かねたのか、たまごを自称する不審な転生者は転生前に、契約主から預かってきたからメモ書きを口から吐き出した。

「あく……とりあえずそんな訳でその女神から私に対する取扱い説明書を預かってきたので、まずはこれに目を通すと良いかと」

「嫌がらせですか!?!これは人生八方塞がり陥っている私に対する嫌がらせですか!!?」

「大丈夫、大丈夫、たまごだから唾液とかは付いてないから」

「貴方、異世界出身とはいえ元人間ですよねツ!?最低限のエチケットとか、そもそも訳の分からない存在になってしまった事に対する疑問とか無いのですか!?!」

「ないです」

「もうやだ、このナマモノ……チェンジできないかなあ……」

姫騎士ソフィア、敵が来る前から早くもグロッキー状態である。

「チェンジは出来ないが、変態（変身）は出来るぞ!!」

「ただでさえ存在そのものが変態的なのに、それ以上変態行為に走らないで下さい!!」

たまごはソフィアを励まさんと自己アピールをするが言葉のチョイスが絶望的に悪くて玉砕した、玉子だけに。

しかし、当の本人（“人”扱いが当てはまるかは甚だ疑問だが、とりあえず便宜上として人扱いする）はストレートな存在否定の言葉に「悪くない……少し昂る」と、興奮している。

しかしながら時間というのはどう足掻いても、ナニをヤろうと止ま

らないモノである——一人と一匹が漫才を繰り広げていると、目の前の空間に突如、巨大な光の柱が生じてそこから数十名の武装集団が現れたのだ。

「ああもうー！こんな事している間に敵襲じゃないですか！ヤダアアア！！」

どうやら彼女の懸念通り、アースガルズの軍勢が転移によって電撃作戦を仕掛けて来たようだ——現に死者の兵士達は無言で生き残りの人々を纏めている頭目であるソフィアを取り囲み、隙あらばその頸を獲らんと殺気立っている。

そんな中、タマゴは死者の剣から彼女を庇うように立つ——が、鶏卵位のサイズでしか無いため非常に微妙な画となってしまうのだが、それはさておき。

「取り敢えず変身の仕方がわからないから、急いでその取説読んで下さい！！」

「なんで!?!」

そんな間の抜けた応酬があった次の瞬間、無数の剣刃が姫騎士とナマモノに殺到する。

やべえ、初っ端から何も出来ずにオワタ／＼(´o´)／———そう思っていた時期があったたまごです、たまごはどこにでもいます、よろしくおねがいします(ミーム汚染)。

結論から言うと彼等の攻撃は光の壁に遮られて此方には届かなかった。

「あくもう……最悪です、民間人を逃がすために取っておいた魔力、これですっからかんになりました。なんで自分の能力の使い方すらわからないんですか!？」

「どうやらこの障壁はソフィア殿の魔法らしい、そして彼女の怒りは尤もだが、こればかりはギャグでもなんでもなく、真面目な理由があるのだ。」

「すまない、助かった。実を言うと女神ヘルと私が契約を交わしたタ イミングは本当にこの状況になるギリギリ前の時点で、そこから手遅れにならないよう、急ぎ転生させられたのでそういった説明は現地でする体たいとなつてしまったのだ」

「うっ…そ、そうだったのですか。ならば仕方ありませんね、気が動転し過ぎていました。謝ります——では早速説明書を見るとしましよ う」

「頼む」

「一先ずはどうか落ち着いたので、彼女に早速説明書を開いて貰い、目を通して貰う——が、その直後、ソフィアの顔から表情が泡沫うたかたの如く瞬く間に消失したので、何事かとそのメモを覗き込んだ。」

『転生者 ■■■と、ミドガルズの民へ』

転生体 “エッグ” の能力説明。

卵とは生命の起点という概念であり、即ち無限の可能性を秘めたる物である。

故にその体に備わっている能力は “体の主のイメージする姿への変態である。”

変身時間等の説明もあるが何分時間が差し迫っているため、それは追って別紙を送るから取り敢えず変態するための条件をここに書き記す。

ソイツをどこか柱の角など、硬い所へ——

叩きつけて割れ』

転生早々ダイナミック自殺が能力の発動条件とは、あの世の女神も中々鬼畜である。

もし私が前世同様、人間の身体だったら危うく股間の射突型ブレード♂？が暴発する所だった：フウ。

「いや、貴方はそんな扱いで良いんですか!？」

ここで会ったばかりのナマモノに気を遣える辺り、彼女は本当に優しい性分なのだろう。

だからこそ、私はそんな彼女に私をかち割る役を頼むのだ（外道）。まず、願いを聞いて貰うには相応のポーズを取らねばなるまい。

私は頬を赤くし、眼を潤ませながら上目遣いで彼女にお願いをする。

「（身体を力ずくで碎かれるのは）初めてだから……出来れば優しくして欲しい……」

その瞬間、ソフィアの眼からハイライトが消えて彼女が絶対零度の殺意が乗った眼光で此方を観ながらがつしりこの身体を掴む凶に快感が電流の如く身体中を駆け巡る。

そして——ソフィアはまさに般若のような形相で、私をこの部屋の壁の角目掛けて全力投球した。

「死ねえエエエエ!!」

「ンア”ア”——ッ♂?!」

未だかつてない衝撃が身体を千々に砕いてゆく——私はそのあまりの快感に野獣のような咆哮を上げた。

ブチキレたソフィアの全力投球によって砕け散ったタマゴから溢れ出す夥しい量の白濁え——眩い白光の奔流が広間を束の間、満たす。

そしてその光が収まった時、ソフィアが観たモノは——ウサギを模したキグルミのような愛くるしい頭と、禪だけを身につけた筋骨隆々の雄々しき肉体が合体したナニカだった。

「うっ……!?!」

そのおぞましきに対する生理的な拒絶反応が、ソフィアに強烈な吐き気を催させる。

姫騎士ソフィア、ゲロインになるか否か尊厳の危機だ!!

【三発目】R—15「微グロと微エロならセーフじゃろ？♂♀？だけどなあ!!」

「ウツ……オ〃エ〃エ〃エ〃エ」

死人の戦士達に囲まれた中、限界点に達した吐き気を堪えきれずとうとう口からソレを吐き出した——ウサギ頭のムツキリスケベの変態が。

「お前が吐くんかい!!」

前フリもクソもない唐突に起こったクソ展開にソフィアはつい吐き気を忘れて愛用のメイスで件のナマモノをぶん殴ってツツコミを果たす。

このテの創作モノでは騎士の得物といえは剣のモノが多いが、大きな魔物や甲冑を身につけた騎士の類いを■す場合、いちいち斬れるヶ所を瞬時に見極めたり斬鉄という変態的な技量を要求される上にリーチが微妙な剣よりも、普通に大きな鈍器による打撃で装甲の護りを無視して骨と臓腑を潰すなり、長槍等でリーチ外から貫く方がハードルが低いし致命傷を与えやすいから、この世界では近接武器といえは棍棒や戦鎚、長槍や斧槍にサイドアームとして肉厚のコンバットナイフか、それと長剣の中間くらいの刃渡りの小剣をベルトのアタツチメントを通して佩くのがスタンダードなのである。

……決してハリセンの代わりではないのだ!!

閑話休題、メイスで殴打されて仰け反るナマモノの口から飛び散る吐瀉物は光を反射し虹を描くが、神の傀儡とされた死人達もそれを被るのは生理的に嫌なのか、顔をしかめて一歩後退る。

なお、彼等の存在は怒濤の展開にブチギレたソフィアの意識から一時的に消えている。

「ねえ！何で今から戦おうって時に更に意味不明なナマモノに変態するの!?そんなでもってゲロるの!?正直吐きたい気分なのはコッチだったんだよ!!」

「年頃の少女がゲロるのは絵面的にマズイだろう」

「既に取り返しがつかないくらいにやべー光景になってんだよ!!しまいにや叩き潰して肉団子にするぞ！ナマモノがあ!!」

「……そうか、すまない」

「ま、まあ……わかってくれれば良いんです。一応、ヘル神との契約とはいえ、貴方が私達を助けに来てくれた事実には感謝していますし……」

流石に協力者にあたる彼女をマジギレさせるつもりはなかったのか、素直に謝罪するウサギ（笑）に、ソフィアも一先ずは怒りを鎮めた。

「いや——もつと凄い事になるから、先に謝っておこうと思つての事なんだが」

「………あ？」

——が、束の間正気を取り戻した彼女も床に撒き散らされた黒いヘドロ状の吐瀉物がうねり、そこからム○クの叫びのあの狂気じみた断末魔のような表情をした貌をした人魂みたいなモノが無数に涌き出すという冒瀆的な光景を間近で見せられて、そのあまりのおぞましさにハイライトが二度、タヒんだ——SAN値直葬である。

「眼には眼を、死者には死者だ!!」

「もうお前、神に裁かれるオ——!!」

アウトだろ、冥府の神に世界のバランスを立て直すように頼まれて来ておいてソレは完全にアウトだろ、ヴォーダンとやってる事が大差

ないじゃないか、お前……!!という殺意と良心が入り混ざったソフィアの渾身のツツコミにこの明らかに邪悪な魔王とかその腹心の部下がやるような禍々しい所業を為したウサギ○は 待て、ちゃんと解説するから。

と、答えたのでソフィアはソレだけでヒトを殺せそうな視線を解いて、再び自分達から少し距離を取って此方の隙を伺っている敵の軍勢から眼を離さないようにしながら無言で説明を促す。

「まず、これは見てくれはソレっぽいがあくまでも変態した私の能力で生み出された産物なので実際の死者とは何も関係ない——此方の世界で分かりやすく言うなら魔法等で一から作り上げた使い魔のよいうなモノだ」

「それはそれで生み出す過程もその造形も悪趣味過ぎますね!!」
「しかしまあ、効果は抜群だ。 見るが良い」

ウサギ○の言葉に釣られて襲撃者達の方を見ると——そこにはイカ臭い臭気が漂う中、白目を剥いて口から泡を吹きながら地に倒れ伏し、ガクガクと壊れたゼンマイ仕掛けの人形みたいな状態で痙攣する男達がいた。

「アレは標的の身体に後ろの孔から不法侵入し、憑く。そして憑かれた者の感覚は全て快感に変換され、それが三千倍に増幅されて快樂堕ちするので!!快樂に耐性の無い者ならばテクノブレイク必至だな!!」
「酷い……酷すぎる……」

二重の意味で昇天していくエインヘリヤル達。

なんてモノを寄越してくれたんだ、あの世の神は——精神的に色々限界に達したソフィアはどうとう意識を失った。